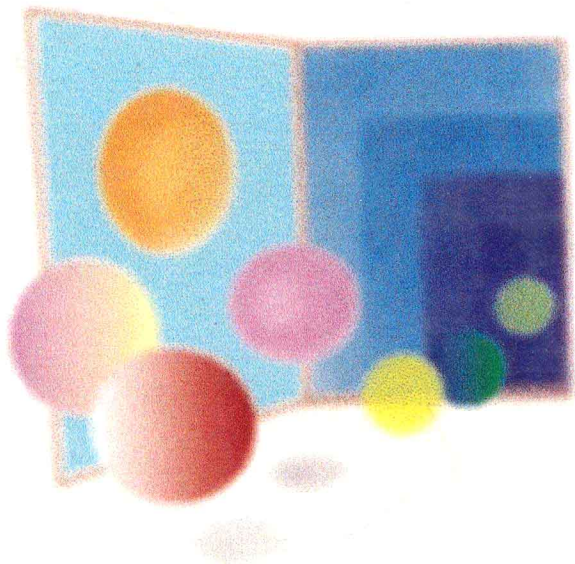


助辞「は」のすべて

村田美穂子



至文堂

〔著者略歴〕

村田美穂子（むらた・みほこ）

昭和31年、東京生まれ

昭和54年、学習院大学文学部卒業

現在、千葉大学留学生センター非常勤講師

助 辞「は」の す べ て

平成9年9月20日発行

著者 村田美穂子

発行所 至 文 堂

東京都新宿区西五軒町4-2

東京(3268)2441(代)

発行者 黒河内 平

印刷・製本 大日本印刷株式会社

ISBN4-7843-0187-9 C3081

助辞「は」のすべて

村田美穂子



至文堂

目 次

はじめに	7
序章 助辞ハの用法の2分類——「提示」と「認識」——	11
第1章 提 示	
その2分類「項目の提示」と「想定範囲の提示」	13
1 項目の提示	14
項目の分類…18／「単純項目」と「対比項目」…18	
1) 主題の提示（Xは）	23
「主題のある文」と「主題のない文」…23	
(1) ハとガ	27
応答の「それは」と「それが」…27／応答の「それはそれ は」…29／「Xが」の伝えるもの…30／「Xは」の伝えるも の…32	
(2) ハとヲ格	35
(3) ハと格助辞	37
(4) ハとハダカ格	41
(5) ハとニ格	42
(6) ハとニ格、ハとデ格	44
(7) ガ・ヲ・ニ・デ以外の格は主題になるか	45
(8) ハとノ	46
(9) 名詞＋並立の助辞＋ハ	49
(10) 名詞＋副助辞＋ハ	50
(11) 固定した言いまわし	50
Xはもとより、Yも…50／Xはともかく、Yは…52／する ことはない…52／する／したうえは…54／なに＋ハ…55	
(12) 助辞ハがつかえないばあい	56
2) 設問の提示（Xとは）	58
(1) 疑問の表明（疑問文）が後続する	58
(2) 解答の表明（名詞文）が後続する	60
(3) 見解の表明（形容詞文）が後続する	62

3) 関係の提示 (格助辞＋ハ)	64
「位格」について…64／格全般について…68／助辞ノにつ いて (Xのは) …68	
(1) ニ格の提示 (Xには)	69
〈時〉〈所〉をしめすニ格＋ハ…70／その他のニ格＋ハ…74	
(2) デ格の提示 (Xでは)	81
〈所〉をしめすデ格＋ハ…82／その他のデ格＋ハ…85	
(3) ト格の提示 (Xとは)	87
(4) ヘ格の提示 (Xへは)	89
(5) カラ格／ヨリ格の提示 (Xからは／Xよりは)	90
(6) マデ格の提示 (Xまでは)	91
4) 前提の提示	93
(1) ヨリ＋ハ (Xよりは)	93
(2) 動詞のテ中止形＋ハ	94
動詞のテ中止形＋ハ…94／後置詞＋ハ…98／「Xにしては」 …101／「Xとしては」3 態…102／接続詞＋ハ…106／接続 詞・副詞として…108	
(3) 副詞＋ハ	109
(4) 動詞のテ中止形＋ハ＋動詞 (ちぎっては投げる)	113
2 想定範囲の提示	118
想定範囲の分類…118	
1) 条件の提示	118
(1) ニハで提示される条件	119
X なしには…119／せずには…120／しないことには… 121／した日には…122	
(2) テハ (デハ) で提示される条件	123
動詞 (読んで) …124／イ形容詞 (青くて) …127／断 定のダ (Xでは) …127／テハ (デハ) ＋いけない／ならな い…131／テハ (デハ) ＋疑問の副詞…133／提示される条 件が負でないばあい…133	

2) 程度の提示（副詞＋ハ）	134
3) 限界の提示	136
(1) 〈量〉の限界の提示（〈量〉をあらわす名詞＋ハ）	137
(2) 〈時〉の限界の提示（〈時〉をあらわす名詞＋ニハ）	139
(3) その他の限界の提示（Xにはなる）	140

第2章 認 識

その3単位「語」「句」「文」	143
1) 語の認識	146
語の分類	146
(1) 動詞	146
読みはする…146／読むには読む…148／読むことは読む…148／漢語動詞（読書はする）など…148／補助動詞つきの動詞…150／読んでいのはする…150／読んではい…150／読んでいるにはいる…152／その他の複合動詞（青くはなる・読みには行く）…152	
(2) イ形容詞、および同様の語形変化をするもの	153
青くはある…153／青いには青い…154／青いことは青い…154／なくはない・読まなくはない…155／ないことはない・読まないことはない…156／ないではない・読まないではない…156／読みたくはある・猫らしくはある…157	
(3) 断定のダ	157
猫ではある…158／しずかではある…161／読むようではある／猫のようではある…162／読んでではある、その他…163／Xではあるし…163	
2) 句の認識	165
句の分類	165
(1) 副詞など＋動詞	165
副詞＋動詞（はやくは読む）…165／動詞のテ中止形＋動詞（いそいでは読む）…168／助動詞のニ中止形＋動詞	

(わかるようには読む) …168	
(2) 名詞＋格助辞＋動詞……………	170
Xでは＋動詞…170／ニ格とト格…172／Xには＋動詞…	
172／Xとは＋動詞…174	
3) 文の認識……………	178
(1) 提示をかねないばあい……………	178
(2) 提示をかねるばあい……………	180
主題の提示をかねるばあい…181／関係の提示をかねるば	
あい…182	
用例について……………	185
単語にとりこまれた助辞ハ……………	190
おわりに……………	195
事項・人名索引……………	197
語句索引／助辞ハの用法（外形による検索）……………	見返し

は じ め に

本書の目的は、現代語の助辞ハのすべての用法について考えることである。

多くのすぐれた先行論文が、現代語の助辞ハについてふれている。それら先行論文での指摘、諸説の変遷などについては、青木伶子の『現代語助詞「は」の構文論的研究』（平成4年、笠間叢書）にたいへんくわしいので、そちらにゆずり、本書ではあらためてふれない。また、敬称はすべて省略させていただく。

先行論文での指摘や見解はそれぞれ重要であるが、そこから「ハのすべて」を知ろうとするとなかなか困難なのが現状である。この困難を解消したいと思った。助辞ハだけをあつかい、ハのすべてについて考えてみようとしたのである。助辞ハのはたらきは一様ではない。一様ではないが、ひとつのものである。本書は、助辞ハによってあらわれるさまざまな側面を具体的にしめすことで、その本質について考えようとするものである。そのために、以下のような用語の定義をした。

「詞」と「辞」——本書の用語について 1

「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」「接統詞」などはすべて、その単語自体で独立の意味を持っている。これに対して、「助詞」と呼ばれている品詞は独立の単語としてはたらいっていない。「助詞」は、名詞に接続するかたち（名詞＋助詞）でだけ機能する。「助詞」には単語のおもかげがないのである。この点で、「助詞」は他のすべての品詞と区別されなければならない。「助詞」のこのような特殊性に配慮して、「助詞」を他の品詞と区別する意味から、本書では「詞」の文字をふくむ「助詞」という用語を避けようと考えた。その代わりに「助辞」という用語をもちいようと思う。

「主題」「主格」「主体」それから「主旨」——本書の用語について 2

助辞ハについて考えるにあたり、まず、本書でもちいる用語についてさらに少々述べておく。

三上章は『現代語法序説』（昭和28年）で「主語」という用語を廃止すべきだと主張した。この主張は、助辞ハを考えるうえで非常に重要である。助辞ハのはたらきについて考えるために必要な用語はまず「主題」であり、次に格のひとつ「主格」である。「主題」というのは「Xは（名詞＋ハ）」のかたちで文にあらわ

れるもので、松下大三郎が『改選標準日本文法』(昭和3年)のなかで「題目」と名づけたものである。この「Xは」とあらわれる題目(本書における「主題」)を、ヨーロッパの言語(特にラテン語)の「主語」のように考えるのが混乱のもとだと三上は主張したのだった。三上は松下の考えを支持し、一般化しようとしていた。

本書では、この主語廃止論にもとづいて「主語」という用語はもちいない。「主題」と「主格」、そしてもうひとつ「主体」という用語によって考えていこうと思う。「主格」は、おもに「Xが(名詞+格助辞ガ)」のかたちで文にあらわれる。「主体」は、たとえば「あなたの気持がわたしにはわかる」という文の「わかる」本人、つまり「わたし」のことをいう。

もうひとつ、本書では「主旨」という用語をもちいる。文にはそれぞれ情報としてまとまった内容があるが、その内容の中心をなすものが文の「主旨」である。主旨は、おもに文中の格関係に依存する。「ネコがネズミを追う」も「ネズミをネコが追う」も文の主旨はおなじである。助辞ハは、このような文の主旨にかかわらないばあいが多い。助辞ハのある文を助辞ハのない文に変えてみたとき、両者の内容の中心、文の主旨に変化のおきないばあいが多いのである。しかし、助辞ハの有無が文の主旨にかかわるばあいもある。たとえば、助辞ハのない文「腹がへっていきさができない」と、助辞ハのある文「腹がへってはいきさができない」をくらべると、内容がちがう。文の主旨がちがうのである。

助辞ハの有無が文の主旨にかかわるか、かかわらないか。これは、助辞ハのはたらきを考えるうえで重要な問題である。

「話し手の意図」ということ——本書の用語について 3

ことばについて考えるばあい、基本は発話だ。「話し手」がいて「聞き手」がいるという状況が基本である。話し手には、聞き手に伝えたい情報があるのだ。文字が使用されることによって、「話し手」に対応する「書き手」、「聞き手」に対応する「読み手」というたちばも成立したが、本書では「話し手」と「書き手」をまとめて「話し手」、「聞き手」と「読み手」をまとめて「聞き手」と呼ぶことにする。つまり、ことばによって情報を伝えようとするたちばが「話し手」、その情報を受けるたちばが「聞き手」である。話し手は一方的に情報を送りだしているのではない。話し手はいつも、聞き手との相互関係の中にいるのである。

本書では「意図」という用語をもちいる。ことばの基本は発話であるから、この「意図」は当然「話し手の意図」である。発話される内容にはかならず「主旨」があるが、会話は主旨の応酬だけで成立しているのではない。話し手は時に応じて、聞き手に「意図」を伝えようとしているのだ。「あした映画に行きませ

んか」とのさそいに、「あしたはちょっと……」とこたえることは「拒否の意図」をあらわしている。さらに「あさってなら……」とこたえたなら、これは「条件付きの承諾の意図」をあらわしている。会話におけるこのような意図は、確実に相手に伝わるのである。発話には「主旨」のほかに「意図」がひそむ。会話において話し手が聞き手に伝えようとする情報は、その主旨だけで成り立っているのではなく、意図をもった話し手と合わせてはじめて成り立つものなのだ。「話し手の意図」を無視して助辞ハを考えることはできない。

助辞ハにとりくんだ結果、名詞の格や副詞の問題、また、現在曖昧なままにされている用語の定義づけなどについて考えなければならないこともあった。文法を総ざらいした気がする。

本書では多くの用例をもちいた。用例は引用部分だけでは文脈がつかみにくいばあいには、筆者（村田）が用例中に（注：）としておぎなった。用例の末尾に著者名をしるした。これらの用例は、すべて日本人による原文である。これらの用例から助辞ハのさまざまな側面を再確認し、全体像がきざげればうれしい。

序章 助辞ハの用法の2分類

—「提示」と「認識」—

助辞ハは、文の中でどういう位置に置かれるか。まず思いうかぶのは、名詞についた「Xは」というかたちである。この助辞ハは文節の切れ目である。

- 1 木曾路はすべて山の中である。〔島崎藤村7〕
- 2 私は交番の前で落葉をひろつた。〔高村光太郎265〕
- 3 スペイン王家は、伝統的に純血の維持を鉄則としてきた。〔江村洋124〕

「木曾路は」「私は」「スペイン王家は」はそれぞれひとつの文節であり、文のながれの中で、たとえば「木曾路」と「は」を切りはなすことはできないが、「木曾路は」と「すべて山の中である」のあいだではひといきいれることができる。

- 4 当時、私には一日一日が晩年であった。〔太宰治・走れ8〕
- 5 ミミズについては、わからないことがいっぱいある。〔奥井一満92〕
- 6 やがては、宇宙飛行士のほとんどが左ききという時代がやってくるかもしれません。〔斎藤茂太219〕

用例4～6も用例1～3と同様、「私には」「ミミズについては」「やがては」がひとつの文節と考えられ、ハでひといきいれられる文である。このような位置に置かれる助辞ハをすべて、本書では「提示のハ」と呼ぶことにする。

「提示のハ」は文節の切れ目をしめす。これに対して、助辞ハが文節の切れ目をしめさないばあいがある。

- 7 いまからでも遅くはないのです。〔開高健・末裔53〕
- 8 飛行機の音ではなかった。〔村上龍7〕

用例7・8のようなばあい、そもそも「遅くない」も「音でなかった」もふたつに切りはなすことができない。切りはなせない部分に助辞ハが割り込んでいるのである。したがって、「遅くは」と「ない」、「音では」と「なかった」は、一気に読みすすむ部分である。われわれは助辞ハでひといきいれることができない。このような位置にあるハを「認識のハ」と名づけ、「提示のハ」と分けて考えることにする。

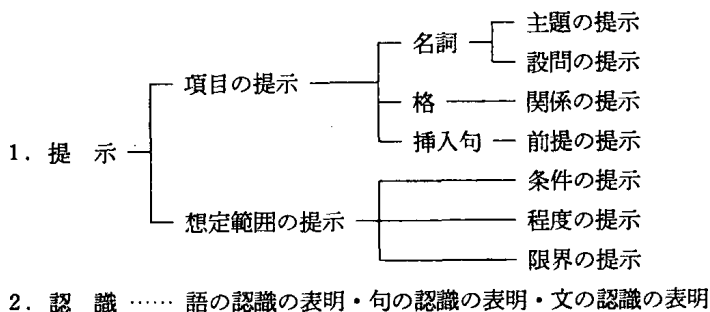
「認識」は、発話する内容について話し手が十分に納得しているばあいに表明される。発話する内容を単に「知っている」だけではない。「認識」の表明は特に肯定文であきらかである。納得して「たしかにこうだ、でも」「なるほどまことにこのとおりだ、しかし」と逆接とむすびつくだ。用例9・10がその例であ

る。

- 9 ツマグロヒョウモン（注：蝶の一種）が1匹、斜面にいて、風のまにまに遊んでいる。位置を変えはするが、いつまでたってもそこを離れない。[三木卓89]
- 10 この父親は息子に、臣下ではあってもカリル・パシャを、「ラーラ」、先生と呼ばせていた。[塩野七生20]

文中の助辞ハが文節の切れ目であるか、そうでないか。助辞ハのはたらきは便宜的に大きく分けてこのふたつである。この「提示」と「認識」という2分類にもとづいた体系を図1にしめた。

図1 助辞ハのはたらき（1. 2. は章立てに対応している）



第1章 提 示

その2分類「項目の提示」と「想定範囲の提示」

「提示のハ」について、表1にそのすべての用法をまとめた。

「提示のハ」は、さらにふたつに分けられる。文全体をながめたとき、助辞ハはその文の主旨にどのようにかかわっているのか。その文の主旨を伝えるために、助辞ハは必要不可欠なのか（助辞ハに義務性があるのか、ないのか）。助辞ハが文の主旨にかかわる（義務性がある）か、かかわらない（義務性がない）か、ということである。このこたえを、表1の「文脈の中でのハ」にしめした。そして、助辞ハが文の主旨にかかわらない一群を「項目の提示」、かかわる一群を「想定範囲の提示」と名づけた。さらに、「項目の提示」はよっつに、「想定範囲の提示」はみっつに分けられる。

「項目の提示」の中には「前提の提示」、「想定範囲の提示」の中には「条件の提示」があり、この「前提」と「条件」という用語については少々説明が必要である。それは、「条件」という用語のあらわすものが一定せず、混乱をまねきやすい現状があるからである。特に動詞のばあい、「前提」も「条件」もどちらも「テ中止形＋ハ」のかたちで提示されるため、おなじかたちを二分する意味がはたしてあるのか、という疑問が当然出るだろう。この疑問に「二分の意味あり」とこたえられなければ、そもそも「提示」をふたつに分けることの根拠もなくなってしまふ。

「前提」と「条件」という用語の定義は、それぞれ当該の部分（前提：93頁、条件：118頁）でくわしく述べる。ここでは、「項目の提示」と「想定範囲の提示」のちがい、つまり助辞ハの義務性の有無のもつ意味について簡単に述べておこうと思う。

話し手は、助辞ハをもちいて聞き手に情報を送り出すとき、最後まで言わなければならないか、助辞ハ以降は言わずにすむかの判断をしている。最後まで言わなければならないか聞き手に情報が伝わらないばあいは、助辞ハに義務性があるとはいえない。このばあい、主旨だけを伝えるという意味では、助辞ハは格助辞に還元できたり、取り去ってしまえたりするからだ。これが「項目の提示」である。これに対し、助辞ハ以降を言わないでも聞き手に情報が伝えられるばあいがある。このばあい、助辞ハがあるおかげで助辞ハ以降を伏せることができるのである。つまり、助辞ハに義務性があるのである。これが「想定範囲の提示」である。「前提の提示」と「条件の提示」にも、これに対応したちがいがある。

表1 提示のハ

ハが提示するもの			外 形
項 目	名詞	設 問	ト＋ハ
		主 題	名詞＋ハ
	格	関 係	格助辞＋ハ
	挿入句	前 提	ヨリ＋ハ 格助辞＋動詞のテ中止形＋ハ 副詞＋ハ
想 定 範 囲		条 件	否定＋ニハ(否定が後続する)
			テハ／デハ(非過去が後続する)
		程 度	副詞＋ハ
		限 界	量をあらわす名詞＋ハ 時などをあらわす名詞＋ニハ

1 項目の提示

たとえば、ある猫（話し手）が聞き手を前にして「吾輩は」と言い出すとき、この話し手は聞き手に「何者であるか、お話ししましょう」と表明しているのである。話し手は、「猫である」という後続部をすでに準備しているのだ。「吾輩は」と助辞ハで文節が切れ、これがそのまま「吾輩は（何者か＝問い）」という問いの表明になっている。この問いに、「猫である（＝こたえ）」が後続する。

この例の「吾輩」は、話し手が聞き手にこれから伝えようとする情報の見出しである。本書ではこのような見出しを「項目」と呼び、「吾輩」を項目とすることを表明している助辞ハのはたらきを「項目の提示」と呼ぶ。

11 次はあすなろう学園前。〔渡辺淳一209〕

用例11はバスの車掌の声である。車掌は乗客への情報をいつも準備していて、

用 例	文脈の中でのハ	
ホメロスとは何者であるか。	(かたちが固定している)	
吾輩は猫である。象は鼻がながい。	ハが格助辞に還元できる	文の主旨にかかわらない
ロンドンには騎馬警官がいる。 隣家では犬を飼っている。 彼とは3ヶ月ぶりに会った。 外へはいつでも出られる。 明日からは／明日よりは夏服着用。 大阪までは新幹線で行こう。	ハがなくても主旨が変わらない ハに義務性がない	
バラよりはユリがいい。 彼をのぞいては全員いる。 かつてはここに川が流れていた。		
涙なしには語れない。見ずには帰れない。	ハが後続部の内容を制約する	文の主旨にかかわる
知られては／暗くては／不況ではこまる。	ハがないと主旨が変わる ハに義務性がある	
くわしくはのちほど伝えます。		
2千人はいる／いない。 7時には帰る／帰らない。		

「次は (どこに停車するか)」という問いを設定し、「あすなろう学園前」とこたえを後続させている。

提示された項目に後続する内容(こたえ)は、断定でも命令でも疑問でもよく、肯定的でも否定的でもよい。どんな内容でも、問いのこたえとなりうる。ただし、たとえば「吾輩は」にどんなこたえが後続するのか、聞き手には予測できない。

提示される項目の内容は、話し手が了解しているものにかざられる。

12 手術の跡の疼きは当然続くだろうと医者が言った。なにしろ人間の腹部を切り開いたんだから、痛くてあたりまえですよ。[森瑤子166]

話し手の医者は患者の痛みを体験できないが、この「疼き」は腹部を切り開いた結果と了解されている。

13 橋のたもとで、泉中はカメラに、維子のすがたをおさめた。「足は写さないでね」／まだ、支那服と下駄にこだわっていた。[舟橋聖一85下]